

# 『比喩と認知』再訪

## ——メタファー研究における社会指標的転回の可能性について——

*The Poetics of Mind Revisited:*  
On the Possibility of a Social-Indexical Turn in Researching Metaphor

永井那和

Tomokazu NAGAI

**Abstract:** This article reviews the Japanese translation of one of Raymond Gibbs's compendiums, *The poetics of mind*, and critically assesses the translators' afterword in relation to Gibbs's recent works after the publication of the original version in English. To do this, I will first briefly summarize *The poetics of mind* as well as the translators' afterword. Second, Gibbs's theoretical and methodological perspectives towards metaphor are reconsidered. This is done by examining works from 1996 to 2008 that clearly show changes from an individualistic, cognitive-psychological approach to an interactional, socio-cultural one. To be more specific, during that period, what he consistently tried to do was as follows: (1) critically identify cognitive linguistic theories, methods and their limitations, (2) reflect upon his own cognitive-psychological, thus, individualistic approach to metaphor, (3) establish a replicable, comparable identification procedure for metaphorical words and expressions in texts and discourse, and (4) explore more interactional, socio-culturally contextualized approaches towards the use of metaphor (i.e., metaphor performance) than before, using such methodologies as ethnographic interview and dynamical systems approach. Finally, taking these into account, I claim that the translators' afterword fails to fully capture the change in Gibbs's orientation mentioned above, suggesting the possibility and necessity of an interactional or social-indexical turn in metaphor research in the near future.

## 1. 導入、および本論考の構成

周知のとおり、昨今の比喩、とくにメタファー研究の発展は目覚ましい。たとえば、日本国内の動向を一瞥するだけでも、2007年に、本邦初の学際的研究書となる『メタファー研究の最前線』（楠見，2007）が編まれており、われわれは、この書物を参照することで、日本におけるメタファー研究の今日的布置状況を容易に把握することができる。

そのような状況下、2008年、現在、カリフォルニア大学サンタクルーズ校心理学教授であり、メタファー研究の国際的学術誌 *Metaphor and Symbol* の編集者の一人でもある比喩論の大家、レイモンド・W・ギブズ・ジュニア（Raymond W. Gibbs, Jr.）が、これまでの比喩論をまとめ、自身の論考を練りあげた、今日でも古典中の古典として読み継がれている *The Poetics of Mind: Figurative Thought, Language, and Understanding* (1994) が、辻幸夫氏（認知科学・言語心理学）、井上逸兵氏（社会言語学・英語学）らの手によって、14年の時を超えて邦訳書として蘇った。「英語で書かれているばかりか、そのあまりの分厚さに致し方なく遠慮していた方々」（p. 524）が、この邦訳版『比喩と認知：心とことばの認知科学』と（再び）向き合うことによって受けることのできる知的恩恵は大きい。

以上を背景に、本論考は、後者の書物、すなわち『比喩と認知』を読み直し、その再評価を試みることを主な目的としている。その際、ただ、翻訳書のみを読み返すのではなく、翻訳書だからこそ可能なこと、つまり、原著出版（1994）から翻訳書の出版（2008）に至るまでの間に、ギブズの比喩論がどのように変容・展開していったのかを、彼の主要な論点のひとつであるメタファーに関する論考に焦点化してみよう。そのような作業を経たうえで、再び、『比喩と認知』へと帰り、翻訳書に新たに加えられた箇所、すなわち、辻、井上両氏による監訳者あとがきを批判的に吟味する。最後に、監訳者あとがきでは明示的に言及されていない、心理学者、認知科学者ギブズのもうひとつの側面、すなわち、コミュニケーションにおけるメタファーの語用・実践という、相互行為的な志向性を指摘することで、メタファー研究における、（認知）意味論を超えたパラダイムへの移行の可能性、すなわち、メタファーの相互行為的、社会指標的転回の可能性を示唆し、『比喩と認知』を、そのような可能性の原点として再コンテキスト化、再評価する。以上が、本論考の構成である。

## 2. 『比喩と認知』概要と理論的構え

では初めに、論を起こすにあたり、『比喩と認知』の概要とギブズの理論的構えを簡単に確認する。本書の章立ては以下のとおりである。

- 第1章 序と本書の概観
- 第2章 字義的に考える、字義的に話す
- 第3章 比喩的言語の理解は特別な過程なのか
- 第4章 言語と思考におけるメタファー
- 第5章 メタファー表現の理解
- 第6章 イディオム性
- 第7章 メトニミー
- 第8章 アイロニー

## 第9章 子どもの詩的な心

## 第10章 今後の方向性

ギブズはまず、言語に関わる事象について論じる際の方略として、非常に簡潔に言ってしまうば、言語を自律的なものとしてとらえる「生成論の賭け (generative wager)」と、言語を人間の思考や認知様式との相互作用のなかでとらえる「認知論的賭け (cognitive wager)」という二つの項を立て (Clark & Malt, 1984)、後者の方略を、本書の比喩論全体に通底する理論的構えとして同定する。

「認知論的賭け」を採用したギブズは、前掲の章立てからも自明であるが、第2章において、比喩とは何か、比喩的であるとはどういうことかと問う前に、伝統的な意味論においては議論の余地のないものとして当然視されてきた「字義性」の問題に着手する。字義の意味とはコンテキストの影響を受けていない、安定した意味であり、語には本来的に字義的な意味が備わっているという、伝統的な意味論が依拠してきた「意味の容器説 (container view of meaning)」を、「語や文には字義の意味があるというわれわれの判断は、このような判断がなされる文脈にかなり依存している暗黙の知識が複雑に絡み合って実際には成立している」(p. 458) と喝破し、字義の意味の不安定さ、特殊さ、つまりコンテキストへの依存性を、実験的証拠にもとづき例証する。さらにこの認知科学者／心理言語学者は、上記のような意味の内在説の歴史的、イデオロギー的側面、すなわち、ホッブスやベーコン、ロックなどといった、17世紀イングランドの経験主義哲学者による近現代言語・コミュニケーション観との連続性にも言及し、字義性の神話を、実験心理学のみならず、史的・社会語用論的な視座<sup>1</sup>から多角的に相対化しつつ、自身の比喩論の基盤を整備してゆく。

95

第3章以降、ギブズの比喩論の全貌が徐々に明らかになるのだが、ここでは、グライスの協調の原理に支えられた四つの格率を基準とする推意の理論や、サールの発話行為論などといった英米系ミクロ語用論 (メイ, 2005[2001]) における比喩的言語理解、すなわち、「標準語用論モデル (standard pragmatic model)」が、上述の意味の容器説と同様、批判的に検討される。「標準語用論モデル」は、比喩的言語、すなわち、非字義的言語の非字義的理解に到達するまでに、以下の手順をふむことを要請する。

- (a) 発話の字義の意味を算出する。
- (b) その発話の字義の意味が意図された意味かどうか、またその字義の意味が特定の文脈に照らして不適切かどうかを決定する。
- (c) 協調の原理ないし言語行為の諸規則を通じて、伝えられている意味、つまりメタファーの意味を算出する。(ギブズ, 2008, p. 87)

比喩的言語の理解に対して、このような見方をすること自体、もはやこれらの「語用」理論は、皮肉<sup>2</sup>にも自らの「意味論的」指向性を露呈してしまうことになっているのだが、ギブズは、これに対し疑問を呈し、再び心理学的実験的証拠を提示することで、これらを誤ったものとして退けている。つまり、字義の意味に絶対的基礎をおく標準語用論モデルにおいては、比喩的な意味とは、字義の意味よりも特殊であり、かつ、周辺的なものであり、それゆえ、比喩的な意味を理解、算出するためには、特殊な心的過程を必要とすることが強く含意されている。心理学的実験という枠組みに限定すれば、この考えは、たとえば、字義の意味の理解よりも、比喩の意味の理

解に要する時間は長い、というような反証可能な仮説へとひとまず置き換えられるが、多くの研究の結果は、そのような仮説を支持していない。それどころか、ギブズの言を借りれば、「比喩的言語表現は、それが特別であるとか思考の逸脱を反映しているのだと明示的に認識することなく労せずして理解されうる」ものであるということが、実験科学的に証明されたのである (p. 123)。

意味論における「意味の容器説」、英米系マイクロ語用論における「標準語用論モデル」を超えて、ギブズは、比喩的な思考こそ、人間の身体性に基礎づけられた、自然な心の働きであり、これまで周辺の位置に追いやられ、「語用論のごみ箱」に投げ込まれてきたさまざまな種類の比喩的表現と、その認識過程を精緻にみてゆくことで、心の、本質的に比喩的な、すなわち詩的な構造が浮かびあがってくると主張する。

そのような比喩観を受け、第4章から第8章では、メタファーについての論考を軸に、イデオム、諺、スラング、メトミニー、シネクドキ、アイロニー、サーカズム、トートロジー、撞着語法などが個別に論及される。これら比喩表現は、すべてではないにせよ、基本的に、概念メタファー論、構造写像論、理想認知モデル、イメージ・スキーマ、放射状構造などといった概念的、前概念的構造に動機づけられているとし、これら諸概念が集中的に議論されている認知言語学との理論的親和性を前面に打ち出している。

第9章では、子どもが、言語の字義の意味を理解し、産出する能力は、比喩的言語のそれに先立って獲得されるとする、標準語用論モデルが子どもの発達段階へと投射された旧套の心理学的見解を批判し、上記で個別に扱った比喩的表現の理解を検証する実験的証拠にもとづき、子どもの心にもある程度、詩的な構造が備わっていること、それどころか、ある特定の文脈においては、子どもも大人同様の比喩に対する理解を示す場合があることを指摘している。

終章となる第10章は、自身の「心の詩学」の総括にあてられており、今後、比喩研究に従事する際に留意すべき分析の多次元性、異なる種類の比喩の相互作用、比喩の機能的多様性、そして、言語と認知が結ぶ諸関係を明らかにするための、さまざまなレベルにおける仮設の設定・洗練化と実証的研究の必要性といった一連の課題を提示することで、比喩研究における今後の方向性を示している。

以上、本章では、非常に簡単にではあるが、『比喩と認知』の概要を示した。ギブズの比喩論／心の詩学において提出された考えをまとめるならば、以下になるだろう。すなわち、認知論的賭けを採用している以上、言語と心は不可分であること、身体性に支えられている比喩的言語、比喩的意味、比喩的思考は、決して周辺の・逸脱的なものではなく、むしろ、字義的言語、字義的意味、字義的思考の大部分が、前三者に依存していること、そして、比喩的思考は、心の基本的な部分を構成しているのだから、子どもも、大人同様、比喩的に考え、比喩的言語を理解・産出できるということは当然であること、以上の3点に集約することができよう。このようなギブズの姿勢をふまえ、次章では、原著出版以降のギブズの論考の主要なトピックのひとつであるメタファーに関する論考に着目し、邦訳版出版年までの理論的、方法論的推移の過程を追う。

### 3. 「監訳者あとがき」(2008)[1994]から「最前線」(2008)：

#### 社会文化的コミュニケーションの地平へ

本章では、ギブズの『比喩と認知』の原著が出版されてから邦訳版の出版年までの論考をいくつか参照しながら、その14年間に観察されるギブズの変化を描出するが、その準備段階として、

『比喩と認知』に付されている監訳者あとがきで述べられている、本書とギブズに対する位置づけを確認しておこう。

### (1) 監訳者あとがき

辻・井上両氏による監訳者あとがきによれば、『比喩と認知』は、認知科学の内部で起きた、記号計算主義・表示主義的から身体論的・環境生態学的枠組みへのパラダイム・シフトが「言語・思考・行動」の比喩論というアリーナにおいて顕在化したものとして位置づけることができ、その根幹には、認知心理学と認知言語学の枠組みが関与していることを指摘している。つぎに、認知、心理学系だけでなく、人類学やミクロ社会学的視点も盛り込んでいるギブズの比喩論の広範な射程に言及しながらも、ギブズの心の詩学を「Lakoffらの唱える認知言語学的比喩論と立場を同じくするもの」(p. 520)であり、「認知言語学と実証的研究の親和性」も顕著、さらに、「心理学の側からの認知言語学的な比喩論に賛意を表明」(ibid.)するギブズの立場に言及することにより、ギブズと認知言語学との間にある、強固で親密な関係が強調されている。

もちろん、第2章で確認したように、これらの記述が基本的に正しいということはいうまでもない。しかし、原著出版年以降の論考を追ってみると、理論的にも方法論的にも、ギブズが認知言語学(者)と足並みをそろえて歩んでいるとは必ずしも言いきれない。さらに、これに関連して、「意味の生成と理解、身体性や身体的経験と意味の関係について」(p. 522)考察する、最近のギブズの研究動向にも言及がなされているが、この点についても、近年のギブズの論考をいくつか見てみると、上の引用では十全にとらえきれていない側面が看取される。以下では、その詳細を確認するため、『比喩と認知』の原著出版以降のいくつかの論考をとりあげ、それらが結ぶ、ギブズの像を描出し、監訳者あとがきを批判的に吟味する。

### (2) ギブズの思想：時系列的再コンテキスト化

『比喩と認知』の原著以降のギブズの志向性の変化を追うため、本項では、筆者が、ギブズの思想を記述するうえで重要と考え、選定したいくつかの論考を時系列に並べ、簡単な要約・解説を加える。

#### 1) 「認知言語学における認知」論文(1996)

この論文においてギブズは、認知言語学における「認知」の意味を、認知科学(心理学)と対比させることにより明確にしている。「認知論的賭け」(第2章参照)を採用し、認知機構や身体との関連で言語に接近しようとする認知言語学の理論的有用性を認めながらも、言語データの分析には、結局のところ、旧套のチョムスキー系の言語学がとってきた分析者の個人的な直観に頼っているという点、そして、言語データの説明がつねに事後的な動機づけに終始している点において、限界、問題があることを明示的に指摘している。『比喩と認知』ではうかがうことのできた距離感、相対的な視点が、この論文でははっきりと読みとることができる。

#### 2) 「メタファーを頭の中から文化世界へ」論文(1999a)

この論文は、1) でみられた認知言語学的アプローチに対する批判のまなざしが、それまでのギブズ自身の比喩論、すなわち、『比喩と認知』で採用した比喩観にも向けられている点、そして、心理学における状況的認知アプローチ、社会文化的アプローチのみならず、人類学系メタファー論への肯定的な言及が数多くなされているという点において興味深い。

ギブズは、出来事や感情などといった、比較的抽象的な事象をメタファーとして概念化するに

は、これまで主に用いられてきた説明項、とくに、身体的経験から抽象されるイメージ・スキーマや、より根本的には、個人内の認知活動だけでは不十分であると主張する。

認知とは、身体を媒介とする外部世界との相互作用によって生起するものであり、外部世界で起こっている社会文化現象を解釈し、反応する身体自体が、すでに社会文化的な構築物であると述べられており、認知に対してエコロジカル、かつ、人類学的な志向性を露骨に示し始める。このように、人間と世界を分かちつつ媒介する身体の社会文化的負荷を認めることで、人間と外部世界との連続性、さらには、個人の頭のなかで起きるとされてきた認知活動の社会文化的状況（環境）依存性に着目し、いわゆる「認知に対する個人主義(an individualistic view of cognition)」および身体（的経験）の相対化を図っている。

この論文では、メタファー研究における認知的枠組みに加え、人類学などの社会文化的アプローチをとる学術領域などの学際的知見の必要性を説いてはいるものの、具体的なアプローチが示されておらず、プログラムの様な様相を呈するにとどまっていることは確かである。しかし、少なくとも、これまでの枠組みを鍛えつつ、メタファー研究の新しいパラダイムを模索するギブズの姿は明確に読みとることができる。

### 3) 「メタファー研究」論文(1999b)

これは、メタファーを研究する、といってもそれはメタファーのどの側面なのか、そしてどのような理論、方法論を組み合わせるのかという問題を扱った論文である。『比喩と認知』の終章でも言及された、メタファーの多次元性に議論を絞り、六つの具体的なガイドライン<sup>3</sup>を提示し、峻別すべき概念をメタファー初学者にも理解しやすいよう、ことばを尽くした解説がなされている。1)、2)の論文を考慮すれば、直観を超えた、メタファー研究の手法の厳密化、洗練化、具体化をめざし、指針を示すギブズの志向性がうかがえる。

### 4) 「ブレンディング理論を心理学的に活用する」論文(2000)

Fauconnier と Turner らによる概念統合ネットワーク (conceptual integration network) についての理論、すなわち、ブレンディング理論を、主に心理学の立場から批評した論文である。まず、ギブズは、ブレンディング理論の長所を同定しつつ、ポパー (Popper, 1959) がいう「反証可能性 (falsifiability)」を有していない点、また、「メタファー研究」論文でも研究ガイドラインのひとつとして設定された、意味の構築における過程と産出物を明確に区別していない点などをとりあげ、心理学的な批判に従事している。しかし、一方で、人が、現実の社会的生活のなかで、ある概念を獲得するだけでなく共有することができるのは、社会的環境において生起するコミュニケーションにおける個人間の共同作業を通してであり、すべての複雑な概念が、個人の力による、複雑な認知的処理のみによって理解されているわけではないと断言している。1)の「認知言語学における認知」論文との連続性を保持しつつ、「メタファー研究」論文と同じ年に出版された「文化世界」論文で示された方針が、このブレンディング理論に対する批判にも色濃く反映されている。

### 5) 「癌を経験した女性の語りにおける身体化されたメタファー」論文(2002)

癌を経験した6名の女性を対象に、エスノグラフィック・インタビューを行い、その語りの内容を構成する多様なメタファーのあらわれ方に注目した研究。この論文で特筆すべきは、これまで、心理学的実験に従事してきたギブズが、エスノグラフィック・インタビューを方法論とし

て採用していることがあげられるのは当然だが、さらに注目すべきは、インタビュー内容のメタファー分析を経て、インタビューという相互行為自体にも再帰的でメタ・コミュニケーション的な視点を向けることで、使用されたメタファーを、単に健康や病気に対する個人的な概念化の仕方としてとらえるという、語られた次元の一元的な分析ではなく、インタビューにおいて、ある種の慣習的、創造的なメタファーを使用することによって、メタファーの使用者がインタビューという相互行為のなかで、どのような自己を提示しようとし、他者と関係を結ぼうとするのか、また、どのようにして語りという相互行為における「真実」を獲得するのかという、語りそのものの次元に対する言及もなされているという点であろう。

これまで、主に（認知）心理学や認知言語学のメタファーに対するアプローチを批判し、「文化世界」論文で確認したような、メタファー研究における将来的な指針を提示するにとどまっていたギブズであったが、この論文以降、メタファーの内容や意味の分析に加え、その語用と相互行為の場との間の双方向的な影響関係にも分析的な視点を徐々に向け始めており、彼のメタファー論に相互行為的、実践論的志向性が実際にとり入れられ、反映されてきていることがうかがえる。

#### 6) 「認知言語学とメタファー研究：成功、批判、そして将来の課題」論文（2006）

1970 代後半から勃興した、認知言語学におけるメタファー論の展開に対して批判的検討を加えた論文である。かなり高密度ではあるが、認知言語学の理論や方法論の基本的な姿勢を非常にコンパクトにまとめているという点で、資料的価値も高いといえる。理論面においては、Grady (1997) の論考をとりあげ、CMT (Conceptual Metaphor Theory) と比較して、その有用性を認めながらも、やはり、方法論、とくに分析者の直観にもとづいた言語データの分析手法や、メタファーの認定方法における不透明さには、一貫して批判的な態度をとっている。

99

認知言語学が取り組むべき将来の課題についてのセクションでは、これまでの心理学的知見からの課題を提示するだけでなく、会話分析の枠組みにも言及し、ディスコースが生起するコンテキストにおいて、ある特定のメタファーの卓立に貢献する、相互行為のダイナミクスの考察も同時に必要であると主張している。「認知言語学における認知」論文、および「ブレンディング」論文の延長線上にこの論文が位置していることは、タイトルからも明らかであるが、「癌を経験した女性の語りにおける身体化されたメタファー」論文で、語りのデータを用いた事例研究を行っていることをふまえれば、ギブズが会話分析を代替案のひとつとして言及することは、もはや、まったく不自然なことではない。

#### 7) 「認知言語学者が、経験的方法について、より注意を払うべき理由」論文（2007）

前年につづき、認知言語学者の方法論についての論考である。ここでも、直観<sup>4</sup>、内省、仮説の反証可能性、研究の信頼性や再現可能性、メタファーに対する事後的な説明などについての問題点を指摘したうえで、認知言語学者は、必ずしも、実験心理学者と同じようなりアリティをもつ必要はないにせよ、多くの心理学者が、認知言語学的方法論に対して強く感じている懐疑心を払拭するためにも、そのような実験的・経験的方法論に対する理解を深め、他の領域とより接合可能なかたちで、認知科学の一端を担うことが重要であると主張している。

#### 8) 「メタファー抽出法」論文（2007）

Peter Crisp, Raymond Gibbs, Alice Deignan, Graham Low, Gerard Steen, Lynne Cameron, Elena Semino, Joe Grady, Alan Cienki, Zoltan Kövecses, これら 10 名のメタ

ファー研究者からなる Pragglejaz Group による、メタファー的言語表現の抽出方法 (MIP; Metaphor Identification Procedure) の手順が、具体例を用いながら詳しく解説されている。抽出法の詳細についての言及はここでは避けるが<sup>5</sup>、この論文は、メタファー研究の国際学術誌 *Metaphor and Symbol* に掲載されたものであることも鑑みれば、これまで主に認知言語学において採用されてきた直観的、内省的方法論は、今日のメタファーのパラダイムから事実上、放棄されつつあると考えることができ、今後のメタファー研究においては、これまで以上に、方法論に関する議論が、より具体化していくことが予想される。

#### 9) 「メタファー・パフォーマンスの社会・認知的ダイナミクス」論文 (2008)

近年、心理学にもとり入れられているダイナミカル・システム・アプローチ (DSA; Dynamical System Approach) を、コミュニケーション分析に応用し、メタファーを、言語、認知、社会、文化的変数全体と関わるパフォーマンス (実践) として扱った初めての論考。

これまで、メタファーの認知的、言語的側面に固執するあまり、ないがしろにされてきた、メタファー実践とマイクロ・レベルの社会的機能との相関や、ある特定のメタファー実践を可能にさせる、言語共同体で共有されている文化的知識との関係を、時空間的に多層的な談話出来事、すなわちコミュニケーションに包摂しているという点、さらに、談話分析に近いデータの提示の仕方、これらを一瞥するだけでも、本論考におけるメタファーに対する接近法はこれまでにない性格を有していることがわかる。

より具体的にいえば、メタファー・パフォーマンスを、ダイナミカル・システム・アプローチを援用して分析する場合、基本的には以下の三つの分析的次元が想定されている。第一に、対面コミュニケーションにおける会話データを秒、分単位でみてゆき、複数使用されるメタファー的言語表現が概念化している対象を同定し、メタファーが、当該の会話の構造に与える (非) 一貫性とその変化<sup>6</sup>を観察するという次元。第二に、分析対象となったコミュニケーションの参加者同士の会話を、月単位、年単位という長期間にわたって観察をつづけることで、あるメタファーが放棄されたり、あるいは共有されたり、さらには、別の包括的なメタファーへと収斂してゆく様子を観察し、コミュニケーション参加者同士が、小さなスピーチ・コミュニティを形成してゆく際に部分的に関与してくると思われる「グループ・メタファー (group metaphor)」を獲得する様子を見てゆく次元。そして第三に、共通の言語を有する者同士で構成される、よりマクロな共同体で、第一の分析的次元において観察されたメタファーは、どのような語用論的価値、文化的志向性と結びつき、その共同体の成員同士の会話に、ある一定の構造を与えているかを分析する次元。このように、マイクロ/マクロを視野に入れた、長期的な観察と多層的な分析を要するダイナミカル・システム・アプローチを用いることで、メタファーを、言語、認知、社会、文化との関係で包括的に扱うことの可能性が、これまでにない具体性をもって示唆されている。

#### 10) 「最前線」論文 (2008)

メタファーに関する最新の論考が集められた論文集への導入として書かれたもので、今日のメタファー研究の広範な射程の見取り図を読者に提供している。ここでも、コンテキストのなかで使用されるメタファーの社会的機能や文化的媒介性への関心が強くあらわれており、同時に、研究手法に関しても、今後のさらなる洗練化の必要性が主張されている。なお、前年に日本で出版され、本論考の冒頭でも言及した『メタファー研究の最前線』と比較することによって、国内外のメタファー研究における、二つの「最前線」が有する重複、すなわち、近年、ますます学際性



を兼ね備えつつある点と、差異、すなわち、とりわけ国外における、コミュニケーションに根差したメタファー（語用・現象）分析への強い関心が明確になるだろう。

#### 11) ギブズの思想、および監訳者あとがき再考

これまで、本章では、『比喩と認知』邦訳版の「監訳者あとがき」を起点とし、やや性急にはあるが『比喩と認知』の原著以降、邦訳版の出版年までにギブズによって執筆された論文から、いくつか重要と思われるものを選び、時系列的に注釈・解説を施した。以上のプロセスをふり返れば、まず、方法論という観点において、1970年代後半から、認知科学者、心理言語学者として社会化したギブズは、当然、実験的手法でメタファーをはじめとするさまざまな比喩についての研究を行ってきた。同時期、とくにメタファー論において影響力を発揮していた認知言語学に対しては、理論的志向性を強く共有していたせいも、一時期、監訳者あとがきにもあるように賛意を示していたことも確かである。しかし、1990年代半ば以降、心理学において、妥当性、再現可能性をもたないものとしての直観や内省というデータ分析方法は、すでに退けられており、結果、認知言語学的方法論とは徐々に距離をとるようになり、やがて、それらの方論に対し、一種の苛立ちのようなものを覚え始める。その間、直観や内省を超えた方法論を模索し、2007年にはギブズも参加した Pragglejaz Group のプロジェクトが、MIP（第3章 第2節 第8項参照）というメタファーの具体的な抽出法として結実し、方法論の洗練化に成功している。

一方、理論的志向性についても、『比喩と認知』において展開された「心の詩学」という比喩観は、認知言語学における CMT をはじめとする諸概念と強い親和性を示したが、1999年の「文化世界」論文では、認知的パラダイムではとらえきれない側面に注意を喚起し、メタファー研究における、社会文化的アプローチを一種、プログラムの開陳してみせた。

101

その後、2002年の論考においては、インタビューの語りのなかにみられる多様なメタファーの分析のみならず、メタファーの「語り」自体の社会的機能についての考察も自らの論考に含まれることになる。さらに、2008年に出版された「メタファー・パフォーマンス」論文においては、コミュニケーションのメタファー実践の多機能性とダイナミズム、そのダイナミズムから組織化される会話・談話の構造的（非）一貫性の社会文化的負荷についての問題、すなわち、「文化世界」論文においては、メタファー研究の展望として掲げられていた課題に対し、正面から取り組み、それに対する新たな接近法とその可能性を提示するに至っている。

以上のように、認知言語学のアプローチのみならず、ギブズ自身が採用してきた実験心理学的アプローチを批判的に検討し、それらが抱える問題点を解消するために必要とされる方法論の模索、さらには、生態学的、社会文化的なアプローチに依拠したメタファー実践の多面的な分析方法を提示したギブズのこれまでの経緯をたどれば、『詩と認知』の原著出版以降、ギブズのメタファー論は、方法論、そして、分析に用いる理論を大幅に改編していることは明白である。監訳者あとがきには、上記の意味での相互行為的、社会文化的アプローチへと歩を進めつつあるギブズの姿は、ほぼ完全に看過されていると結論せざるをえない。

#### 4. 展望：再評価、そして、メタファー研究における社会指標的転回の可能性

本論考では、ギブズの、1990年代前半までの比喩論をまとめた大著、*The Poetics of Mind* の邦訳版の出版を受け、『比喩と認知』を読み直し、そのうえで、原著から邦訳版出版までのギブズの思想の変容過程を、いくつかの重要論文に言及しながらたどり、邦訳版に付されている監訳

者あとがきを批判的に吟味した。最後に、本章において、ギブズの近年の研究からうかがえる、メタファー研究における社会指標的転回（Social-Indexical Turn）の可能性を示唆し、そのうえで、『比喩と認知』の意義を再評価する。

まず、第3章でみたように、ギブズのメタファー論が、意味論やミクロ語用論、認知言語学などの枠組みを超えて、メタファーの実践論、メタファーのコミュニケーション論にまでその射程を広げていることは、これ以上、繰り返す必要はないだろう。メタファーをコミュニケーションの枠組みでとらえるということは、すなわち、簡潔に言えば、メタファーの内容の分析だけではなく、そのメタファーを、ある特定の社会文化的コンテクストのなかで実践することが、後続するコミュニケーションの参加者間の（グループ）アイデンティティや権力関係、さらには、実時間の中で刻一刻と変容するコミュニケーションにおいてなされる行為・出来事の解釈的次元、すなわち、メタ・コミュニケーションの次元の分析に従事する、ということにほかならない。このような次元は、たとえば、社会記号論系言語人類学の枠組みにおいては、発話出来事の諸変数（時空間的パラメータ、ジェンダー、敬意、権力指標など）を指し示す、非・言及指示的次元、ないし、社会指標的次元に相当するものとしてすでに理論化されており（小山，2008）、このような語用実践とメタ語用実践の絶え間ない相互作用は、実践と言語構造、そしてイデオロギーが錯綜する、コミュニケーション出来事を中心、すなわち「いま・ここ」を中心に生起するものである。異なる接近法ではあるものの、ギブズと同様、このようなコミュニケーション出来事の多次元性、多層性の重要さにメタファー論者が目を向けるとき、そのときこそ、メタファー研究パラダイムにおいて、コミュニケーション論的転回、「社会指標的転回」が、起こりうるのではないだろうか。

最後になるが、メタファー研究における社会指標的転回の可能性を示唆するという本論考の主張自体、ギブズの長年にわたる研究の成果とその変容過程によって支えられていることをふまえるならば、『比喩と認知』におけるギブズの比喩論を、本論考の冒頭で確認したような状況下で、しかも日本語で読み直すことで得られた意義は、やはり、大きい。『比喩と認知』は、まさに本論考で示唆した、メタファー研究における「社会指標的転回の可能性」だけでなく、今日のメタファー研究を取り巻く日本のコンテクストをも同時に指し示しているのである。

#### 註

- 1 詳細は Aarsleff (1982)、小山 (2005) を参照。
- 2 このような現象は、ギブズの比喩論では「状況のアイロニー」と定義されている。詳細は、『比喩と認知』第8章を参照されたい。
- 3 (1) 言語的データから異なる種類のメタファーを区別すること。  
 (2) メタファーとメトニミーを区別すること。  
 (3) 過程と産出物を区別すること。  
 (4) メタファー的に理解することとメタファーを理解することを区別すること。  
 (5) メタファーが言語と思考において、どのように相互作用するかを区別すること。  
 (6) 思考と言語におけるメタファーが、身体的に動機づけられていることを認識すること (p. 30)。
- 4 なお、ギブズは、直観や回顧的な方法論に対してかなり懐疑的であるが、それは、ギブズが、単に、(認知) 心理学系の理論的志向性を有していることだけにあるのではない。より具体的に言えば、直観とは、むしろ(認知) 心理学の研究対象であり、多くの実証的研究において、実際の行為と、意識的にその行為に対して言語で描写すること、また、回顧的に語るものの間には、大きなズレがある

ことが確認されている。そのような課題を被験者に複数回実施すると、語られている内容自体が時間や記憶、コンテクストの影響を受けて変化したり組みかえられたりしてしまうということも、すでに心理学の内部で実証されていることなのである。詳細は Gibbs (2007) を参照されたい。

- 5 このメタファー抽出法方法に則った研究事例については、Semino (2008) を参照。
- 6 ダイナミカル・システム・アプローチでは、「アトラクター (attractor)」とその「フェーズ遷移 (phase shift/change)」と呼ばれている。

## 参考文献

- Aarsleff, Hans. (1982). *From Locke to Saussure: Essays on the study of language and intellectual history*. Minneapolis, MN: University of Minnesota Press.
- Clark, H., & Malt, B. (1984). Psychological constraints on language: A commentary on Bresnan, Kaplan, and on Givon. In W. Kintsch, J. Miller, & P. Paulson (Eds.), *Methods and tactics in cognitive science* (pp. 191-216). Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Gibbs, R. W., Jr. (1996). What's cognitive about cognitive linguistics? In E. Casad (Ed.), *Cognitive linguistics in the redwoods* (pp. 27-53). The Hague: Mouton.
- Gibbs, R. W., Jr. (1999a). Taking metaphor out of our heads and putting it into the cultural world. In R. W. Gibbs, Jr. & G. Steen (Eds.), *Metaphor in cognitive linguistics* (pp. 145-166). Amsterdam: John Benjamins.
- Gibbs, R. W., Jr. (1999b). Researching metaphor. In G. Low & L. Cameron (Eds.), *Researching and applying metaphor* (pp. 29-47). Cambridge: Cambridge University Press.
- Gibbs, R. W., Jr. (2000). Making good psychology out of blinding theory. *Cognitive Linguistics*, 11, 347-358.
- Gibbs, R. W., Jr. (2002). Embodied metaphors in women's narratives about their experiences with cancer. *Health Communication*, 14, 139-165.
- Gibbs, R. W., Jr. (2006). Cognitive linguistics and metaphor research: Past success, skeptical questions, future challenges. *D.E.L.T.A.*, 22, 1-20.
- Gibbs, R. W., Jr. (2007). Why cognitive linguists should care more about empirical methods. In M. Gonzales, M. M. Spivey, S. Coulson, & I. Mittleberg (Eds.), *Empirical methods in cognitive linguistics* (pp. 2-18). Amsterdam: John Benjamins.
- Gibbs, R. W., Jr. (2008). Metaphor and thought: The state of the art. In R. W. Gibbs, Jr. (Ed.), *The Cambridge handbook of metaphor and thought* (pp. 3-13). Cambridge: Cambridge University Press.
- Gibbs, R. W., Jr., & Cameron, L. (2008). The social-cognitive dynamics of metaphor performance. *Cognitive Systems Research*, 9, 64-75.
- ギブズ, R. W., Jr. (2008). 『比喩と認知: 心とことばの認知科学』(辻幸夫・井上逸兵・小野滋・出原健一・八木健太郎・訳). 研究社. [原著: Gibbs, R. W., Jr. (1994). *The poetics of mind: Figurative thought, language and understanding*. Cambridge: Cambridge University Press].
- Grady, J. (1997). THEORIES ARE BUILDINGS revisited. *Cognitive Linguistics*, 8, 267-290.
- 小山亘 (2005). 「社会と指標の言語: 構造論、方言論、イデオロギー論の統一場としての史的会話語用論」片桐泰弘・片岡邦好 (編) 『講座社会言語科学 第5巻: 社会・行動・システム』(40-53頁). ひつじ書房.
- 小山亘 (2008). 『記号の系譜: 社会記号論系言語人類学の射程』三元社.
- 楠見孝 (編) (2007). 『メタファー研究の最前線』ひつじ書房.
- メイ, J. L. (2005). 『批判的社会語用論入門: 社会と文化の言語』(小山亘・訳). 三元社. [原著: Mey, J. L. (2001). *Pragmatics: An introduction* (2nd ed.). Oxford: Blackwell].
- Popper, K. R. (1959). *The logic of scientific discovery*. New York: Harper & Low.
- Pragglejaz Group (2007). MIP: A method for identifying metaphorically used words in discourse. *Metaphor and Symbol*, 22(1), 1-39.
- Semino, E. (2008). *Metaphor in discourse*. Cambridge: Cambridge University Press.